

追悼座談会「藤中さんを偲んで」

愛知人形劇センター理事で人形劇団むすび座の藤中智光氏が、本年6月、病気のため逝去されました。故人に縁のあるむすび座や学生時代の仲間が集まり、追悼座談会を開催。故人を偲びました。

【出席者】
たかはしいちげん(人形劇団わたぐも・当センター理事長)
大野正雄(人形劇団むすび座)
市川達也(人形劇団とんかち・当センター監事)
伊藤 進(人形劇団わたぐも・当センター副理事長)

【聞き手】
中 康彦(愛知人形劇センター理事・事務局長)

藤中さんは学生時代から人形劇を始めたのですね。

たかはし 私が名古屋大学で人形劇サークルを創部し、最初に入ってきた新生が彼。

市川 先輩が新生にニックネームを付ける習わしで、当時の中島みゆきのアルバム名から「りんげつ」と命名。そこから今に至るまで皆さんに「りんちゃん」と呼ばれ、親しまれました。

学生時代にアマチュア劇団を立ち上げたと言いました。

市川 当時、西三河にはアマチュア劇団が無く、彼は卒業する私の居場所として「手風琴」を創設してくれました。私が今でも人形劇を続けているのは彼のおかげです。

伊藤 2年先輩の藤中さんと旅行を兼ねた公演に行くために作ったのが「わたぐも」。学生最後の3月に九州へ公演旅行に出かけた時、一緒に行った1年生が奥様。



人形劇団むすび座「トッケビ」
キジ役を務める藤中氏

追悼座談会に寄せて

藤中さんとの最初の出会いは、私が入学して直ぐの時期、図書館の前の緑地で藤中さんの弾くギターに合わせて歌を歌う集まりを見た時です。集まりは、人形劇サークルの昼練習だったのですが、私の目にはキラキラとした青春ドラマのシーンのようにうっとり入会を決めました。新入生歓迎ハイキングでのニックネーム決めでは、近くに落ちていたまつぼっくりから「ぼっくり」として藤中さんから命名されました。藤中さんのニックネーム「りんげつ」や、他の先輩の例からすると、突拍子もない名前を付けられるのでは?と恐れていましたが、後輩には気を使ってくれたようです。藤中さんは、人形劇に熱中しすぎたせいか、私が学年を追い抜いてしまい、追いコン(追い出しコンパ)まで世話をしてくれました。

藤中さんは、そのお人柄から、他大学との交友も広く、卒業してからも人形劇を続けた仲間を集め、1982年12月?に手風琴を結成しました。私が手風琴に入団したのは、しばらくして、藤中さんから入団の誘いを頂いてからのことです。藤中さんは、人形劇に情熱を燃やすのはもちろんのこと、団員の親類にも気を配り、合宿やドライブなども多く行いました。しかし、さらなる人形劇での飛躍を求め、むすび座に入団されるにあたり、1988年3月に手風琴を退団。その後団長を私が引継ぎました。私が、この世界に40年以上も関わっていられる奇跡、それは、藤中さんとの出会いから始まったと言っても過言ではありません。藤中さんをはじめ、これまでに手風琴に関わってくれた皆さまや、その資産に感謝しつつ、気力のある限り続けて行きたいと思っています。

愛知人形劇センター理事 酒井利幸(手風琴)



↑「手風琴」奥三河合宿の様子(1986年8月)右から2番目が藤中氏、左端が酒井→人形劇サークル「どんぐり」の誕生日会で藤中氏が描いた酒井のイラスト



人形劇団むすび座「チト」カミナリさん役の藤中氏(右)

INFORMATION

P新人賞NEXT2025上演団体決定 対照的な競演「THE STAGE」もお楽しみに!



ON

P新人賞NEXTの「P」はパペットの「P」そしてオブジェ+身体パフォーマンスの「P」です。人形劇の新たな創造の可能性を追求する企画として、また人形劇ジャンルの未来を担う斬新な才能を発掘するために企画として、愛知人形劇センターが2011年度より継続開催している次世代に向けての育成事業です。P新人賞NEXTは、名古屋舞台芸術の第一線で活躍するアドバイザーと格闘しながらブラッシュアップした作品を上演するクリエイション企画。2025年度は5団体の応募があり、

2回の審査を経て、神奈川県のパフォーマー「ON」と地元名古屋の「劇団ひとみり」の2団体が上演会「THE STAGE」に挑みます。個人パフォーマーと劇団という180度趣向の違う2団体が、ヒトガタ、オブジェ、身体表現に向かい、それぞれの個性を磨き上げて上演に臨む「P新人賞NEXT THE STAGE」は、2026年2月14日(土)・15日(日)の2回公演。当日は終演後、昨年度参加の2団体とアドバイザーを交えたクロストークも開催します。ご期待ください。



劇団ひとみり

P新人賞NEXT2025 THE STAGE

2026年2月14日(土)13:00、15日(日)13:00



ON



劇団ひとみり



特定非営利活動法人

愛知人形劇センター

〒460-0002 名古屋市中区丸の内3-22-21

損保ジャパン名古屋ビル8F

TEL 052-212-7229 FAX 052-212-7309

https://aichi-puppet.net/ MAIL:mail@aichi-puppet.net



©愛知人形劇センター ※本誌記事・写真・レイアウトの転載を禁じます。

通巻330 2025年冬号
発行：特定非営利活動法人 愛知人形劇センター
発行人：高橋一
編集人：中康彦
デザイン：江利山浩二(KINGS ROAD)
編集：小島祐未子(家鴨の編集会)

あぷ Aichi Puppetry

ひまわりホールから
発信する
シアター情報誌

2025 WINTER
VOL. 330

https://aichi-puppet.net/

やるほうも観るほうも
人形劇を気軽に楽しく♪



	①	PUPPET SLAM in AICHIより	
②	③	①はと	②桃源郷
④	⑤	③たかみつ(人形劇団むすび座)	
⑥	⑦	④森仁美	⑤山内庸平
		⑥ON	⑦タラン・ニバキンス



たかみつ
(人形劇団むすぶ座)



ON



Report

パペットスラム、愛知で初開催！ 今後もっとメジャーになるかも!?

パペットスラムとは——アメリカ全土で開催されている短編人形劇連続上演のフォーマット。今回、愛知では参加枠に対し応募が多かったため、選考委員が上演団体を選びました。作品の構想段階のところから応募団体の創作が見られるのは非常に面白く、本番ではさらにブラッシュアップされた作品たちを見ることができました。参加団体の活動経歴も様々(パフォーマーや造形作家、もちろん人形劇人も)で、「人形劇の手法を用いた作品創作は初めてです」と語る団体もあり、7つの実験的・勢力的な作品が上演されました。ノンバーバルの

作品が多く、言葉に頼らずとも人形・オブジェクトが動くだけでクスッと笑えたり心を動かされたり…。幕間のゆめみトランクふたりのMCも小気味よく、パペットスラム全体を盛り上げてくれました。私の「推し」は「オン!」。4本の手とジャグリング用のボールで作るなんと不思議な、けど見入ってしまう世界感。巧みに動く(あるいは動かされている)4本の手を「人形」と捉えるかはそれぞれでしょうが、私は新たな人形劇の可能性を見た気がしました。もう1つ「悪魔と女」。ポケットや仕掛けが盛りだくさんのワンピースを舞台上、ドロドロな

男女の関係が繰り広げられるのも、人形劇だからこそユーモラス! 「お人形あそび」のような人形美術も作品にマッチしていて、お気に入りでした。仕事帰りに、ちょっとした作品が見たい。寄席みたいにフラッと来れて、サッと帰れる…。アーティストにとっても「こんなことやってみたいけど、上演機会がない…」という課題への一助になりうるなあと、パペットスラムの懐の深さとラフさを感じました。日本でもっともっとメジャーになればいいな～!

愛知人形劇センター理事 石田律子

はと



森仁美



MC
ゆめみトランク



桃源郷



山内庸平



クラン・ニバキンス



Report

新しい出会い、嬉しい声にあふれた 子どもアートフェスティバル2025

10月12日・13日の2日間、「ひまわりホール子どもアートフェスティバル2025」を開催しました。「もっと子どもが主役」をモットーに、子どもたちが主体的に参加し、様々なアート体験ができる催しです。全国から出演団体を募集した結果、プロ・アマチュア合わせて計22団体、延べ31ステージが集結。人形劇やミニコンサート、ワークショップなどが繰り広げられました。特に今年度は、囲碁体験(ロボットも登場! 初めての子どもたちも楽しく対戦していました)や能楽囃子方体験など、新しい分野からの出演もあり、子どもたちはもちろん運営スタッフにとっても幅広い交流を楽しむ機会となりました。ご来場いただいたお客様からは「子ど

もの頃に来ていたフェスティバルに、今度は息子と母と三世代で来ました」「赤ちゃんと一緒に楽しめて良かった」といった嬉しいお声をいただきました。昨年のような派手なイベントは控えましたが、今年も都心のオフィスビルに子どもたちの笑顔と歓声が響き渡る、賑やかな2日間となりました。

愛知人形劇センター事務局 辰野美緒



Handa Gote Research & Development
Tomáš Procházka Object Theater Lecture

ハンダ・ゴテ・リサーチ&ディベロップメント トマーシュ・プロハースカ オブジェクトシアター・レクチャー (2025年10月12日)



Report

海外から気鋭アーティストを迎えて学んだ 人形劇&オブジェクトシアターの現在

2025年10月、愛知人形劇センターでは海外のパペットアーティストを招聘したプログラムを2件を実施しました。舞台芸術祭「秋の隕石2025東京」での上演・ワークショップのための来日に合わせ、名古屋で貴重な機会を実現することができました。トマーシュ・プロハースカ氏のレクチャーは、大きく二つのテーマで行われました。前半は1989年以降のチェコの現代人形劇について。チェコの現代人形劇シーンを代表する老舗劇団から新進気鋭のアーティストまで、貴重な写真や映像も交えながら紹介をいた

できました。後半は、自身のグループHanda Gote Research & Developmentについて。初期の作品から現在のアナログな機器を用いたクリエイションに至るまでお話しいただきました。「子どもアートフェス」の同日夜に実施された今回は、人形劇の作り手の参加も多く、参加者から多くの質問が挙がりました。続いては、世界各地で行われ、評判を博しているアリエル・ドロン氏のワークショップ。まずは参加者が持参した「心を寄せているオブジェクト」を動かしてみるワークから始

まり、最後のグループワークでは、「オブジェクトの死」をテーマにしたクリエイションと発表が行われました。終始子どものように楽しくモノと遊ぶ時間でありながらも、オブジェクトシアターの骨子となる視点や取り組み方まで得ることができる時間となりました。オブジェクトシアターは、身近にあるものだけで簡単に始められる、なのに可能性は無限で奥深く面白いものだ!と体現するワークショップでした。

愛知人形劇センター理事 佐和ぐりこ

“The Object and The Stage” An object theater workshop led by Ariel Doron 「オブジェクトとステージ」 アリエル・ドロン オブジェクトシアターワークショップ (2025年10月26日)

